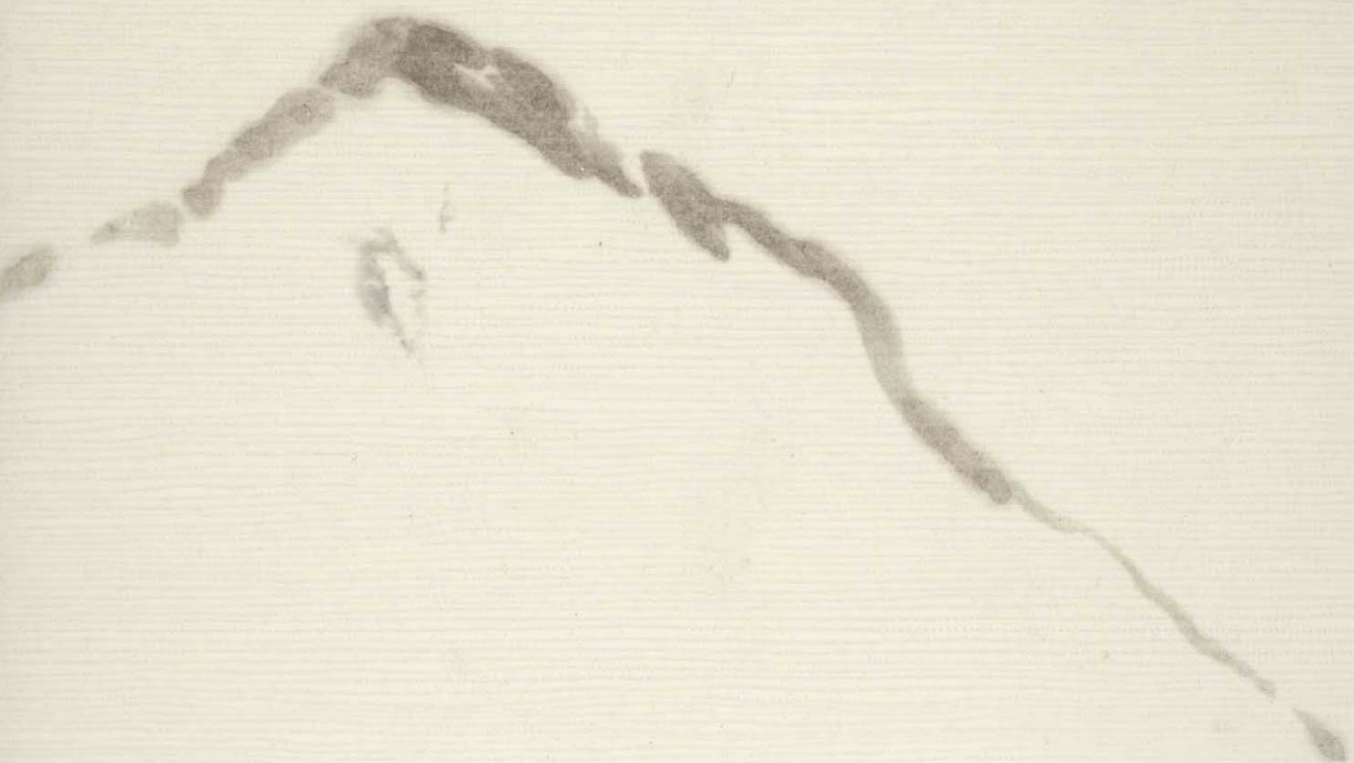




オノコロ列島深層紀行

あとの祭り

戸井田道三

あとの祭り オノコロ列島深層紀行

©一九八六

昭和六十一年八月二十日 初版印刷

昭和六十一年八月三十一日 初版発行

著者 戸井田道三

装丁者 木幡朋介

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三十二
電話 〇三―四〇四―一三二一 営業
〇三―四〇四―八六一 編集
振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷
製本 大口製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価は帯・カバーに表示しています

ISBN4-309-00438-5

戸井田道三（といだみちぞう）
一九〇九年、東京生まれ。早稲
田大学卒。四八年『能芸論』を
発表、以後、『能―神と乞食の
芸術』『観阿弥と世阿弥』『狂言
―落魄した神々の変貌』を出
す。著書ははかに、『日本人の演
技』『祭りからの脱出』『きもの
の思想』『鹿と海』『忘れの構造』
『色とつやの日本文化』など。

あとの祭り オノコロ列島深層紀行 目次

下 北 1970..... 5

高野・国栖 1972..... 59

九州・悪石島 1982..... 123

「あとの祭り」由来..... 241

あとの祭り オノコロ列島深層紀行

上 冊 1970

車中にて

寝台車は下の段がとれていた。同行のエミー（日本の大学で勉強しているカナダの女子学生である）は、私のすぐ上に寝ている。列車はガタコンガタコン同じ振動をくりかえして闇を走っている。どこまでもどこまでも走りつづけてゆくぞ、といきまいているようであった。私は夜汽車（たいへん古風だが）にのるといつも変な錯覚におちいる。この夜は絶対に明けないのではないか。そして乗っている汽車は朝をおいかけて闇の中を永久に走りつづけるのではないか、という変な錯覚である。錯覚の中にいて、目がさえ、どうしてもねつかれなかった。ねつかれないままに、いろいろのことを考えた。

エミーのまえでは、恐山へゆくのが迷惑なような顔をしたが、じっさいは、いきたい気持ちを

[illegible]

字で書くから、やはり西は入るという意味があったのだろうか。それならニシは *west* と似ていると、瞬間的に私の頭の中を駆けめぐった。

「いえ、西方浄土というでしょう。センセイが西へいきたくなるのは、やはり浄土へいきたいと思っているからですか」と、エミーは問いなおしたが、こんどは、私のほうが彼女の問いと問いたい心と離れているのを感じる番だった。問題は、どうもエミーの言葉どおりのところにあるのではないらしい。私は、彼女の問いたいことを察していいなおしてみる破目におちいった。西方浄土という仏教の観念がはいって来て、死んだらその方角へゆくものと信じるようになったのがほんとうなら、西方浄土という仏教思想の以前があったのではないか。つまりニシのほうへひかれる気分があつて、その気分につたから西方浄土という観念が受け入れられたのであろう。そもそも西方浄土という観念からして、もとは太陽が西へはいることと無関係ではなかったにちがいない。それは日本の仏教以前とも似ていよう。それなら、われわれが問題にしなければならぬのはサイハウ浄土がなぜ受け入れられたかであるよりも、ニシという日本語の音自体ではなからうか。ニシという言葉は、たんに抽象的な方位をあらわしていたのではあるまい。ニシという音がだいじだ、と私は説明をこころみた。

エミーは、もう一度「ニシとはなんですか」とたずねた。私は「ニシとはニシだ」というほかないし、そういうのはナンセンスだからだまっていた。すると、エミーは、イニシへという言葉

が西へというのと似てる、といいだした。

私は、思わず笑ってしまつて「去^いにし方だからイニシへは、過ぎ去った方というのがもとの意味だ。西へというのはちがう」と説明したが、これは骨が折れた。

エミーは「だからおもしろくないですか」とまぜかえしてきた。彼女にいわせると、ひとがまちがえるには、それなりに根拠があるというのである。

「私がまちがえるように、むかしの日本人も、なんとなくまちがえたかも知れない。犬が西むぎや尾は東というではありませんか。西と東はまちがえない。けれどイニシへとニシは似ているから、音の感じで意味が溶けあっていたかも知れない。私そう思います。」

エミーは冗談とも本気ともつかない真顔でさかんに自説を主張した。つまり音が同じなために意味が動揺していたらうと強弁するのであった。「犬が西向けば尾が東」というコトワザをそこでつかうのは半可通の御愛嬌であつた。しかし、われわれは字を知っており、ニシといえば西を、イニシへといえは古の字をまず思いうかべる。だから、かえつて言葉の意味の変化やぶれというものかわからないことがある。エミーは、ローマ字で訓みをおぼえるから、われわれの気のつかぬことに気がつくばあいがあるのだらう。とにかくエミーの日本語もたっしやになったと感心した。すると不意に、西行法師のことをいいだしたのは、なおさら驚かされた。

ハンドバッグの中をごそごそやって手帳を出して、あちこちページをめくっていたが、これこ

れとばかり西行のことをいいだしたのである。

「センセイ、サイギョーという坊さん知ってるでしょう。」

「知ってるさ。私の住んでる近くにシギタツサワというのがある。西行が有名な歌をよんだところだ。」

「サイギョウは西へゆくという意味の名でしょう。その人が作った歌だと教えられました。これです」といって、さしだした手帳に「ミチノクノオクユカシクゾオモホユルツボノイシブミソトノハマカゼ」と書いてあった。

「西へゆきたい人がなぜみちのくをおくゆかしく思うのですか。」

「私だって西にだけゆきたいのではなくて、東北にもいって見たい気分はあるんだから、西行もそうだったんだろう。」

「ゆかしく思いますか。」

「ゆかしくは思わないね。東北は私の中ではなんだか暗くグルーミイな感じた。」

私がそういったら、急に彼女は焦点のきまらない顔をした。グルーミイという言葉がどういふふうにつかわれているのか、日本人の感性が一瞬わからなくなったのであろう。われわれはくらくらという音とグルーミイという音を無意識のうちにかさねて感じているらしいことにそのとき気がついた。私は、外人と通じあえない壁のようなものがあるなあと思わないわけにはいかなかった。

た。

「ゆ、かしは行くと関係ありますか。」

またしても質問であった。私は、NHKの『樅の木は残った』の平幹ひらみきのような男性をきみたちは「いかす」というんじゃないか、そのいかすってのがゆ、かしから変化したんだよ、と説明したが、とたんに、ほかのことを思い出して自信はなかった。というのは、いつか若い人から「セックスをしていて、エクスタシーに達したときに日本人はいく、いくっていうでしょ。あれを使役形にしたのがいかすです」ときかされたことがあったからだ。

「アメリカの白人はエクスタシーのとき何といいますか。」

急にわたしは言葉に出してしまった。同時にしまったと感じたが、エミーが、何をきかれているのかでわからない、という顔をして、無言で私を見つめているので、たすかった。すぐそ知らぬ方へ話を転換した。

日本人と反対に来る・来るカムというんじゃないか。いつか映画でそれをきいたことがある。それをたしかめてみたかったのだが、相手がエミーでは失礼だ。

「ぼつぼつ寝ないと近所迷惑だよ」と私がきり出すと、それをシオに「おやすみなさい」とエミーは自分のベッドへ消えていった。

私はガタコンガタコン同じ振動をくりかえす寝台車によこたわって、「いく」という言葉を反

芻していた。英語国民はほんとうに come と感じるのだろうか。

いくとは身体的行動としての行くかどうか。虚弱体質の私は体操の間に脳貧血をおこして気が遠くなったことがある。いくは気が遠くなるというのと同じで、わからぬぼうばくとした世界へいくことにちがいない。子供のころかくれん坊をしていて、テーブルの下へもぐりこんだことがあった。クロースが垂れていたので鬼になった子がなかなか発見してくれなかった。その暗いせまい空間にじっと待っているとき、私はまことに変ないい気持ちになったことがある。なつかしさというかわかしさというかわからないが、たしかに一度こんな気持ちでいたことがあるというからだの感覚だった。それは性的なものであったような気がする。あの感じはどこから来たのであろうか。いや来たようでもあるし、心ゆく感じでもあった。あとで精神分析の本を読むおとなになって、それを思いだしたとき、胎内復帰の感覚だったかもしれないと思ったが、それは自分のことか母胎のことかわからぬものだった。つまり、その地点では来るといくは同一だったのかもしれない。

いにいへという言葉は客観的に考えられると時間経過のはるかな過去をさしている。しかし、そのような空疎な時間ではなく自分の記憶とつながった時間をさかのぼったはるけさが真意であろう。ふるさとという言葉の内容とも似ている。ふつうふるさとといえば「遠くにありて思うもの」と考えられている。その遠さを地理的な距離としてだけ考えると、ふるさとのない人がいく

らもいることになる。しかしふるさと恋しさは誰ももっている。だからそれはたんに地理的なものではないだろう。心のなかの遠い思い出、幼児以前のはるかな感じ、言葉ではなく、肉体がおぼえている何かが、なつかしいふるさとだったにちがいない。たとえば、私のかくれん坊のときのテーブルの下である。あのなつかしい、気の遠くなる思いは言葉になる以前の何かだ。つまり言葉は意識へと化成してくるが、つねに音とリズムなどで肉体性の無意識の尾をひいているのではなからうか。セックスはその原点へもどることだろう。イクというのもクルというのも記憶をこえるかなたへの方向で感じるものにちがいない。空間的な方向性はない。しかし主体の指向性とむすびついている。本来、言葉はそこから発せられるものではなからうか。西というのも方位の意味だけではないものが、こちらの何かを呼んでいるのだと解される。……

すると、暗闇のなかをガタコンガタコンと走っている列車が、記憶以前をめざしてぐんぐん突走っていると思われず、それなのに、ひとつとところに止まっていると感じられてならなかった。これはおそらく錯覚というものではないだろう。

この奇妙な感じをまぬがれるには枕もとの電気をつけねばことたりる。スイッチを入れるとやはり違って感じた。私は眠れぬときの用心に持参した星一つの文庫本『伊勢物語』を出してしばらくめくってみた。